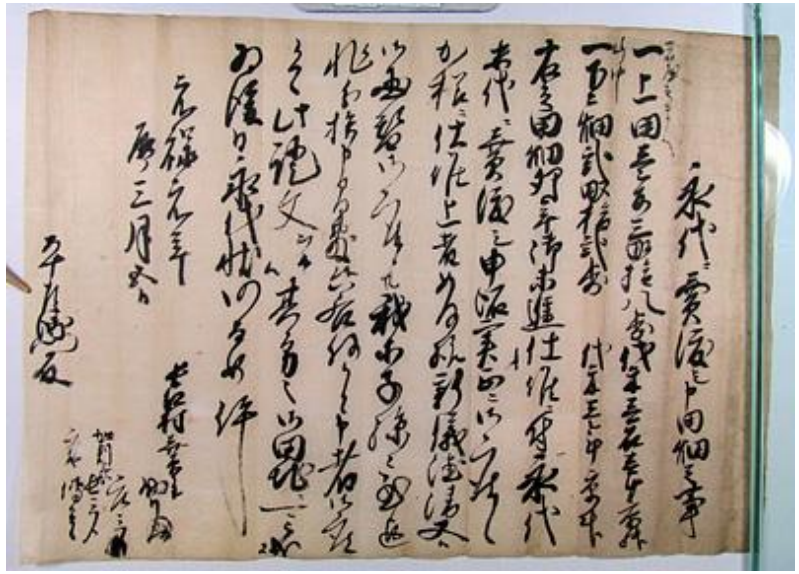
第 37 回「生馬地区の古文書所在確認調査 中間報告」

（松江市松江城・史料調査課歴史史料専門調査員/高橋真千子/2023 年 11 月 1 日修正）

はじめに～古文書所在確認調査について



【写真 1】中倉家文書（松江市蔵）

【写真 2】中倉家文書（松江市蔵）

松江市では、令和 3 年度から文化財保存活用地域計画に基づき地域に残る文化財の調査をおこなっています。当課では、さまざまな文化財の中で特に古文書の調査を重点的に実施しています。「古文書」というと【写真 1・2】のようなものを想像される方が多いかと思いますが、【写真 3】のような明治期以降から昭和中期頃のもの、古写真なども調査の対象としています。

調査は公民館区単位でおこなっており、現在は、生馬・持田・宍道地区を進めています。今回のコラムでは、この中から生馬地区調査の中間報告をしたいと思います。

【写真 3】調査風景（史料は松江市蔵）

さて、生馬地区では令和３年度から古文書所在確認調査を進めています。令和３年度は、予備調査として古文書があるお家と、地域の事をよくご存知の方を紹介していただき、翌令和４年度から本格的に調査を行いました。９月末現在、４地区８件の調査が終わっています。それでは生馬地区の概要と、史料調査の中で見つかった史料をご紹介します。

【写真 4-1】生馬地区での調査風景

【写真 4-2】よく、タンスの中から古い史料が出てきます

1. 生馬地区の範囲と地域の特徴

【図 1】旧生馬村地図（『生馬村誌 復刻版』より転載、生馬文芸会、1980）

生馬地区は、昭和 28 年に松江市と合併した生馬村（上佐陀町・下佐陀町・西生馬町・東生馬町・薦津町・浜佐田町）を範囲とする地区です（【図 1】参照）。松江の北西に位置し、東は法吉（ほっき）地区と接し、南は宍道湖、西は古江（ふるえ）地区と佐太川（さだがわ）を境にして、北は鹿島（かしま）地区と接しています。一畑電鉄の駅でいうと、松江宍道湖温泉駅と松江イングリッシュガーデン前駅のちょうど中間くらいにあたります。生馬地区には松江高等工業専門学校・島根県立清心養護学校・東部島根医療福祉センターなどがあり、学校が多いところでもあります。

【表 1】生馬の産業

	1933 年 （昭和 8 年）		1952 年 （昭和 27 年 4 月）	
産業	戸数（戸）	割合（%）	戸数（戸）	割合（%）
農業	275	87.3	282	81.7
商業	6	1.9	5	1.4
工業	6	1.9	3	1.0
公務	28	8.9	23	9.3
自由その他			32	6.6
計	315	100.0	345	100.0

「戦前（昭和 8 年）及び昭和 27 年対比村勢過去現在比較図表（「村誌」生馬公民館蔵）により作成

【表 2】生馬村の農地・戸数の変遷

	1907 年 （明治 40）	1916 年 （大正 6）	1952 年 （昭和 27）	2020 年 （令和 2）
戸数（戸）	311	295	282	108
面積 （ヘクタール）	389	386	373	139

「生馬村之概要」（「村誌」生馬村公民館蔵）、『生馬村誌 復刻版』（生馬文芸会、1980 年）、2020 年農林業センサスにより作成
注：1907～1952 年の面積については、町をヘクタールに換算し、小数点以下は四捨五入した。

生馬地区の特徴として、一つ目に潟湖（せきこ）が挙げられます。町名の「薦津（こもづ）」「浜佐田（はまさだ）」、あるいは大字の「船津（ふなづ）」「石田鼻（いしだばな）」「舟磯（ふないそ）」などの地名が示すように、生馬の田地の大部分は、かつては「佐太水海（さだのみずうみ）」という潟湖（せきこ）でした。そこに長い年月をかけて土砂が堆積し、江戸時代を通して行われた新田開発により埋め立てられ、現在の形になりました。浜佐田町・西浜佐陀町（古江地区）には、冬に白鳥が飛来する潟（かた）がありますが、これが「佐太水海（さだのみずうみ）」の名残です。また、江戸時代に、水害対策などを目的として、宍道湖から日本海に抜ける佐太川を開削したとされる清原太兵衛（きよはらたへえ）は、地域の誇りとして語り継がれています。

二つ目の特徴として、市街地に近い農業地帯であることが挙げられます。生馬地区の主要な産業は農業でした。昭和 27 年 4 月の「生馬村々勢概況一覧表」には、農家が 81.7%とあり、松江市へ合併する直前まで農家が圧倒的に多かったことがわかります（【表 1】参照）。現在では、【表 2】の通り、農家数は昭和 27 年の 38%程度、面積は 37%程度に減っています。現在各地の農家が置かれている状況と同様に、生馬地区で

も高齢化と後継者不足の問題を抱えています。その一方で、市街地に近いという利点から団地開発が進み、人口が増えるなど活気ある地域となっています。

松江市のホームページに各公民館が作成した「まち歩きマップ」が掲載されていますので、そちらもご参照ください。

2. 浜佐田灘地区の古文書所在確認調査

浜佐田灘地区は、生馬地域では一番南側の地区で、宍道湖に面しています。国道 431 号線を市街地から出雲市方面に走った時に最初に見える集落で、住宅地と田んぼが見えるところです。生馬小学校まで 3 キロメートル以上あるため、公民館は生馬公民館ですが小学校区は内中原小学校です。

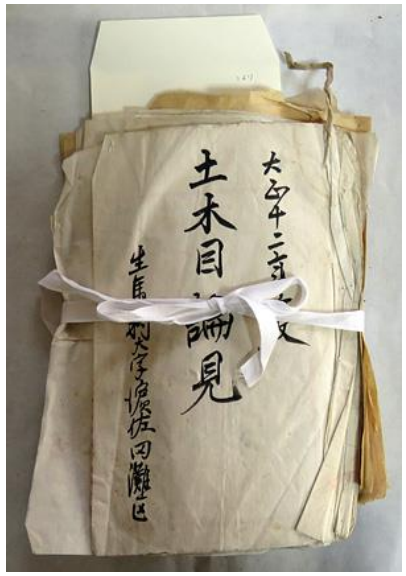
この浜佐田灘地区では、2 軒のお宅にうかがい、調査をさせていただきました。

(1)A 家

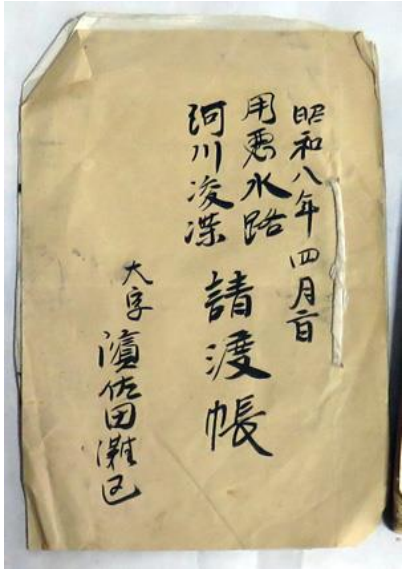
A 家には、家族や親せきの写真、地域にかかわる公共事業関係の簿冊、農機具のチラシ、教科書、戦時中の統制関係の配布物など約 700 点の史料が残されていました。

生馬の潟湖周辺は新田開発などで埋め立てて水田にしたため、一度降水が続くと水田が水浸しとなるなど旱水害がとても起こりやすい土地でした（『生馬の歴史』）。そのため、灘地区では繰り返し用水路や河川工事が行われていたとみえ、A 家には大正期から昭和初期にかけての浜佐田灘地域の工事計画を記した「土木目論見書」、「用悪水路・河川竣工受渡帳」【写真 5・6】のような簿冊がいくつか残されていました。昭和戦前・戦後期にも同様の傾向がみられ、特に昭和 14 年には大旱魃、同 26 年にも旱魃となり、田んぼに大きな地割れが入りました【写真 7】。灘地区では、揚排水施設も悪く、宍道湖から塩水が逆流したり、日照りが少し続くと旱害と

なったりしていました。そのため、佐太川・潟ノ内周辺では、昭和 28 年から 30 年にかけて、サンドポンプで宍道湖から土砂をくみ上げるなど、大規模な土地改良工事を行っています（『生馬の歴史』）。【写真 8】は、その会計関係の書類です。

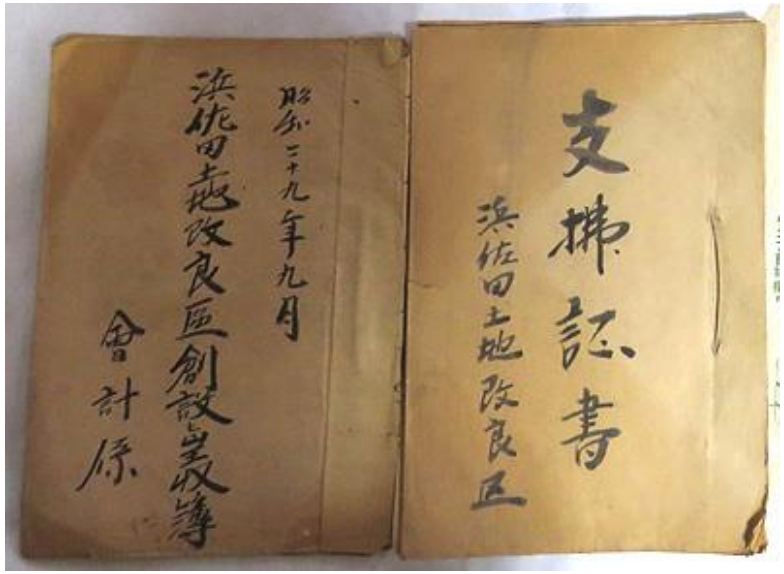


【写真 5】「土木目論見」

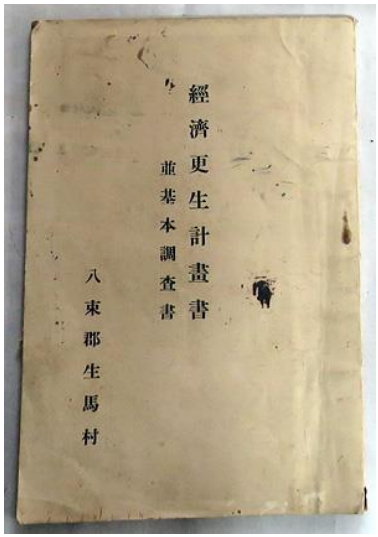


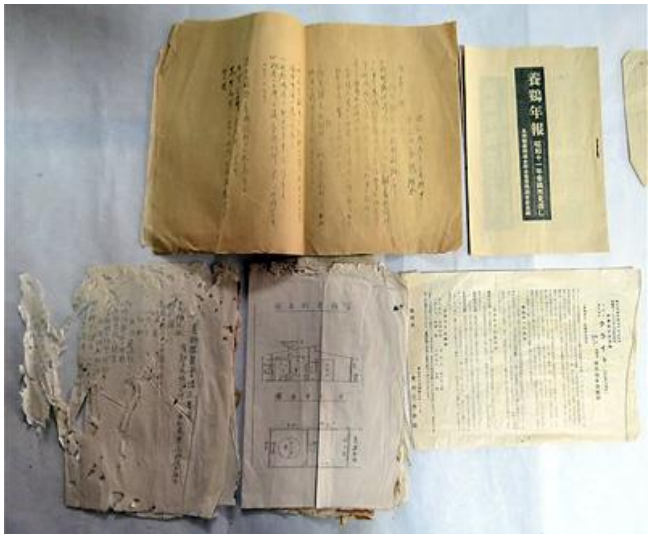
【写真 6】「用悪水路河川竣渫請渡帳」

【写真 7】昭和 26 年の旱害



【写真 8】浜佐田土地改良区関係の書類





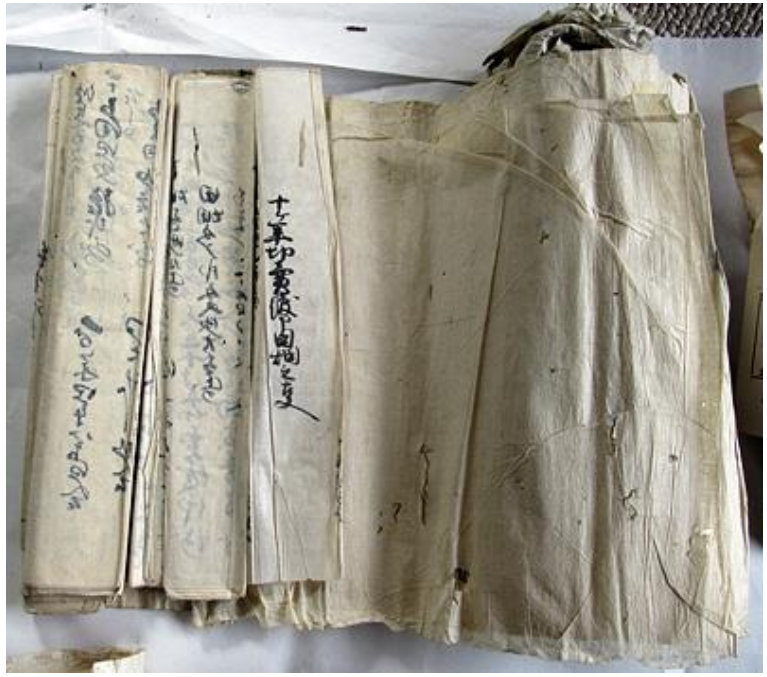
【写真 9】「生馬村経済更正計画書」【写真 10】養鶏関係の史料（一部）

昭和初期の地域の様子がわかるものとして、生馬村信用購買販売利用組合の書類「経済更生計画書（生馬村）」【写真 9】などもありました。この史料は、昭和４年（1929）の昭和恐慌から地域経済をたて直すための計画書です。また、このころ、家業として養鶏をされていたのでしょうか。島根県が昭和８年に指示した「農山漁村経済更生計画指針」によるものと考えられる養鶏関係の書類も多く残されていました【写真 10】。Ａ家の先代は生馬村農会で働いていたため、昭和 15 年頃に農会が開催した食料増産講習会の指導関係の写真【写真 11】や、冊子【写真 12】などもありました。

【写真 11】食料増産指導写真

【写真 12】農会関係の書籍（一部）

(2)B 家



B 家には、約 1500 点の史料が残されていました。尋常小学校や古志原にあった歩兵六三連隊などの集合写真、家族写真が多く、ガラス乾板も見受けられました。ほかにも、江戸時代以降の農家の経営や土地に関する史料、布奈保（ふなほ）神社御当関係史料の撮影データなどがありました。

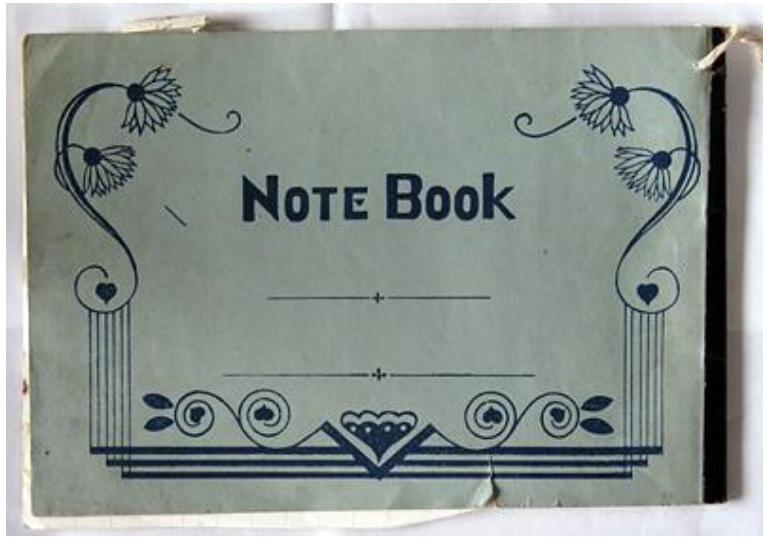
【写真 13】は、江戸時代後期に書かれた「十年切田畑売買証文」です。これは、わかりやすくいうと、土地を担保としてお金を借りる証文です。借りたお金を 10 年で返済したら、その土地は借主に戻ってきます。もし、返済できない場合、借主は貸主に申し立てをし、返済を待ってもらったり、借金を引き受けてくれる新たな貸主と契約を結んだりします。この証文で、ある時期に B 家が担保として所有していた土地と、その規模などがわかります。こうした証文類は、その家にとって重要な書類のため、よく残っている史料です。

また、生馬村役場にお勤めの方がいらっしゃったため、村役場関係の史料もありました【写真 14】。長池（現在は国屋町）の管理や悪水溝経費に関する書類【写真 15】も残っており、農地が広がる生馬村にとって、地域のため池や水路がとても重要であったことがうかがえます。

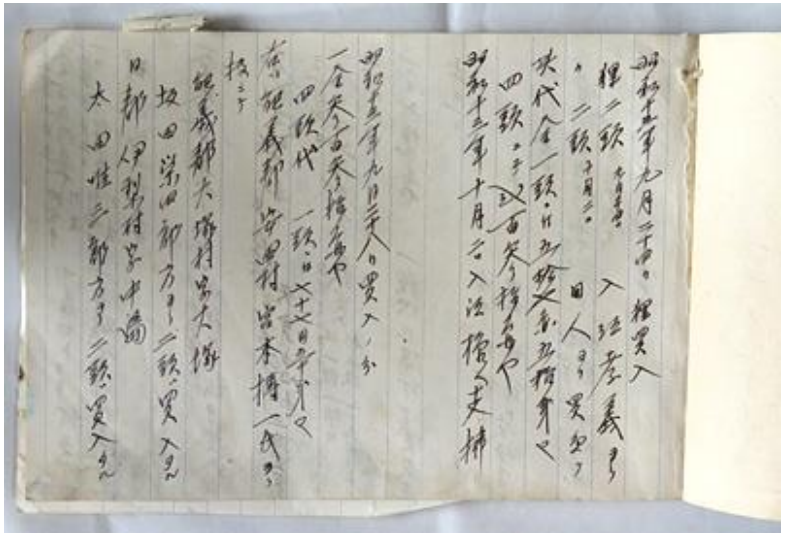
左上【写真 13】「十年切田畑売買証文」　左下【写真 14】生馬村役場文書

【写真 15】長池・悪水溝に関する文書

B 家に残っていた史料の中で面白いものとして、昭和 13 年から 14 年の「狸買入れ帳」があります【写真 16・17】。外套の装飾や航空服などで需要のあった狸は、大正８年（1919）の改正狩猟法により狩猟が制限されたため、各地で養殖されるようになりました。浜佐田灘地区では、B 家を中心とした 5 軒で養狸組合（ゆうりくみあい）を組織し、狸を養殖していたようです。史料とともに残されていた新聞記事に、「県工業試験場入江主事補が一昨年から思ひついた」とあることから、この狸の養殖は、農家の副業を推進していた島根県の主導で行われたことがわかります。養狸組合がその後どうなったかはわかりませんが、アジア・太平洋戦争直前ということもあり、存続が難しくなったかもしれません。



【写真 16】「狸買入れ帳」表紙



【写真 17】「狸買入れ帳」

(3)地域の祭禮・神事

Ｂ家では、浜佐田灘地区にある布奈保神社の御当関係の史料もありました。残念ながら史料原本は失われましたが、一部撮影データが残されていました。また、布奈保神社の祭禮について、Ｂさんと Ａさんにお話を伺うことができました。

- 例大祭 荒神祭(10 月 18 日)

布奈保神社では、毎年 10 月 18 日の例大祭に併せて地域住民が作った龍蛇（りゅうじゃ）（藁蛇（わらへび）のこと）を御神木にまきつけ奉納する荒神祭が行われています。この地区でも、コロナの影響により、直会（なおらい）など会食を伴うものは中断しています。また、２年に１回、海潮山王寺神楽保存会（雲南市大東町海潮）などによる神楽が奉納されます。明治 28 年頃には浜佐田灘地区の有志によって神楽が舞われていましたが、いつのころからかなくなったそうです。

- 御当(オトウ)

布奈保神社では、１月の第２日曜日に神事の世話役をつとめる当番（宿１名・年行事２名）を御神籤によって決めます。これを「御当」といいます。籤に当たった人は、「御当をたまわった」と言い、左儀兆（さぎちょう）をはじめ、社日祭・春秋の祈祷・地蔵まつりなど、その年の行事の世話役をつとめます。

- 御田植(おたうえ)神事

１月５日に、五穀豊穣を祈念しておこなう農耕の模擬神事・御田植神事が行われます。はじめに、ゴザを田に見立てて、その年の恵方に敷き、先に餅を刺した竹を鍬に見立てる「荒おこし」が行われ、「一鍬（ひとくわ）千石、二鍬（ふたくわ）二千石…十鍬（とくわ）で一万石」とはやしながら田を耕す動作を３度繰り返します。続いて「種まき（籾まき）」にうつり、これも「まこうや まこう

や この福の種まこうや」と３度繰り返しはやします。最後に「田植え」として松葉を苗に見立てて田植えをする仕草をし、「一苗（ひとなえ）千石、二苗（ふたなえ）二千石…十苗（となえ）で一万石」と３度繰り返します。ここで神事は終わりをむかえ、直会へとうつります。現在は、神前に大餅（一升餅）を２枚に供えますが、以前は椎の木で組んだ背負子（しょいご）があり、大餅を４枚背負ったそうです。以前は、御当関係の史料や道具を、当家になった家が持ち回りで管理していましたが、現在は失われています。

Ａ家・Ｂ家ともに、家業である農業関係の史料と、個人が関わった地域の史料が残されていました。これらの史料により、生馬の地域としてのあゆみが、また一つ明らかになることと思われます。また、かつて浜佐田灘地区における信仰の拠点の一つであった布奈保神社の史料は、この地区の祭礼の在り方を知ることができるものです。現在もおこなわれている御田植神事や荒神祭は、過去から引き継いだ生きた史料として、これからも大切に引き継がれることを願っています。

まとめ

今回、浜佐田灘地区のみの調査結果を書かせていただきましたが、生馬地域では、これまでに下佐陀・上佐陀・薦津地区で調査をおこない、現在も継続しています。

生馬公民館が平成 15 年に発刊した『絵と写真でたどる 生馬の歴史』には、たくさんの写真や史料が使われていますが、今回の地域調査で、それらが見つかることはほとんどありませんでした。人の日々の営みの中で、不要なものを整理することや捨てるということは、とても当たり前に行われており、この 20 年のうちに残念ながら廃棄されてしまったものも少なくないと考えられます。これは、生馬地域に限ったことではなく、松江市全体でも同じことが言えるでしょう。

「何かわからないけど古いもの」は、どうか捨てないで、一度松江城・史料調査課までご連絡ください。

（監修：元生馬公民館長・佐川東興氏）

参考文献

- 生馬郷土誌編纂委員会編『絵と写真でたどる 生馬の歴史』、生馬公民館、2003 年
- 生馬村編『生馬村誌』（復刻版）、生馬文芸会、1980 年
- 島根県編『新修島根県史』通史扁２ 近代、島根県、1967 年
- 毛皮日本社編『毛皮日本』七月号（第一巻第四号）、毛皮日本社、1939 年
- 古谷春吉『実地研究狸の飼ひ方』、泰文館、1927 年
- 新聞記事（B 家所蔵、スクラップのため新聞社名・掲載年月日不明）